

孤児と個人のアメリカ、それからわたしたち

——わたしの研究とマイ＜ホーム＞——

本 岡 亜 沙 子*

研究集会報告に先立ち、徳永博充先生ご担当の「デジタルメディア制作Ⅰ」の受講生による映像作品「笑顔と信念——本岡亜沙子先生——」を上映した。当該作品は、わたしが別の講義で口にした実家の里親活動をテーマに、メディアビジネス学科1年生（現2年生）の山下湧介君、藤井脩介君、そして近藤恵梨さんが半期をかけて制作してくれたものだ。彼ら3名の作品制作にかかる想いや努力に敬意を表する。また、上記作品の上映が実現したのも、同期のよしみで研究集会の司会をご快諾下さった徳永先生のおかげである。ここに深謝する。さらに、研究集会に来て下さった本学名誉教授の倉頭甫明先生にも謝意を表する。

1. ヒロイックな孤児

1.1 歴史的観点

アメリカ文学は孤児の文学とも言われる。これは、アメリカという国の成り立ちが強く影響している。というのも、カソリックからの離脱したプロテスタントの国アメリカは（宗教的背景）、18世紀末にイギリスから独立し（経済的、政治的背景）、ヨーロッパの誇る歴史や伝統を欠く文化的孤児>状態を自ら作りだしたからだ（文化的背景）。1970年代ポストモダン批評家ジャン＝フランソワ・リオタール（1924–98）は、ヨーロッパを掘れば何か出る地層のイメー

ジに、アメリカを掘り起しても何も出てこない平坦な砂漠、つまり文化不毛なイメージにたとえた。19世紀アメリカの文化的状況をかんがみると、彼の指摘には妥当性がある。当時、ヨーロッパで知名度のあるアメリカ作家といえば、短編「黒猫」（1848）で有名なエドガー・アラン・ポー（1809–49）と、のちに「アメリカ小説の父」と称されるジェイムズ・フェニモア・クーパー（1789–1851）くらいだった。また、アメリカ国内にある小説は、ヨーロッパからの輸入ものか、翻訳書が主であった。独自の歴史や文化を持たない劣等感があったからこそというべきか、アメリカという国は、ヨーロッパからみた文化のフロンティア>になろうとした。このような孤児にまつわる2面性——親不在の葛藤や不安定さと、親から影響を受けない自由さ——を持つアメリカは、孤児にたとえられることが多い。

1.2 アメリカ児童文学のなかの孤児

子どもの国アメリカは、19世紀半ばから子どもの「無垢」性を称え始める。「無垢」な子どもに啓蒙を与えるため、公立学校や義務教育の普及や幼稚園の設立が進んだのもこの頃である。さらに南北戦争の終結した1865年以降、子どもに独自の娯楽を提供する試みも始まり、おもちゃや、宗教色の薄い、スポーツやゲームを題材にした娯楽物語が販売された。

興味深いことに、その娯楽物語には孤児が多

* 広島経済大学経済学部助教

く登場する。アメリカ児童文学の黄金期である1865年から1914年までのベストセラー作品を概観すると、『若草物語』(1868)のローリー、『小公子』(1886)のセドリック、『オズの魔法使い』(1900)のドロシー、さらに『秘密の花園』(1911)のメアリーや『少女ボリアンナ』(1913)のボリアンナなど、孤児、もしくは親との離別を経験した子どもが名を連ねる。本稿ではアメリカを代表する孤児として、マーク・トウェイン(1835-1910)が生み出したハックルベリー・フィンに登場してもらいたい。

1.3 代表的な孤児ハックルベリー・フィン

ハックは、大人用の古着をまとい、残飯を求めて田舎町を素足で歩き回り、夜は空き樽で寝たり路上で野宿したりする少年だ。初登場の場面で猫の死骸を握っているなど、奇妙な行動の目立つ彼は、町民から疎まれている。事実、「ハック接近禁止令」が町内に敷かれているため、ともに孤児という点で似た存在なはずのトム・ソーヤーも、彼との付き合いを包み隠す。トムよりもさらに一線を画する、排除される存在ハックは、＜孤児の中の孤児＞なのだ。

ひょんなことから白人慈善家の未亡人にひろわれた彼は、いわゆるくまっとうなアメリカ人になるため、教会へ連行され、聖書を読まされる。養母の用意する詰襟の服はまるで獄衣のようで、ハックを窒息寸前にさせる。寝る時まで固いベッドとシーツにはさまれる彼は、不眠症に陥る。養母の文明化教育に耐えきれないハックは、彼女の強いる堅苦しい宗教や生活様式を捨て、元のゆったりした生活を取り戻すために、家出する。別の表現をすると、自由な孤児であることを彼は再び取り戻そうとする。

この『トム・ソーヤーの冒険』の結末から『ハックルベリー・フィンの冒険』(1888)に話移っても、ハックは大人から逃げ続ける。その逃げる旅の途中、彼は自分と同じく逃げる人

物>、逃亡奴隷のジムに出会う。筏に乗った2人は、旅の途中で様々な制度や慣習に遭遇する。代表的なのが、アメリカ版『ロミオとジュリエット』とでもいえそうな、南部貴族の宿怨であろう。両家の打合いを目撃し、紳士淑女の裏の顔に幻滅したハックは、彼らの豪邸を去り、質素だけれど安心のできる筏に戻る。

このようにハックは、食事、宗教、服、マナーなどの型にはまることを逃れて、孤児になることを選択する。もともと文化的なものを何も持っていないハック——ひいてはアメリカが、いろいろな縛りから逃げ続ける^{アクション}行為によって、ある種の文化を生みだしていく。文化が無いことこそが文化になったのだ。それは「ハックルベリー・フィンの冒険が無ければアメリカ文学は生まれなかった。」と断言した、『エデンの東』(1952)や『老人と海』(1952)で有名なノーベル文学賞作家アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)も認めるところだ。ヨーロッパにとって孤児であるアメリカが、孤児ハックの物語を通して、ある種文化的な裏付けを得た、といえよう。

2. リアリスティックな孤児

2.1 歴史的観点

孤児を国家的、経済的、政治的、あるいは文学的観点からながめると、ハックのようなくヒロイックな孤児>が目につくわけだが、一方で、アメリカ児童文学には社会問題として疎まれる＜リアリスティックな孤児>も少数ながら登場する。その背景には、19世紀半ば以降、ヨーロッパ移民の急増、南北戦争、不況が災いして孤児が急増した社会的事実がある。小説内には、同時代の政治家や社会改革者が社会問題は正のために講じた策、たとえば労働力の必要な中西部の農村へ都会の孤児を移す「孤児列車」の運行や、孤児院や里親斡旋所の創設、児童労働法の制定など、様々な施設や制度の改革が描かれ

る。本稿では、児童養護施設に入る孤児を描いた作品の一例として、おなじみルーザ・メイ・オールコット（1832-88）の＜若草物語三部作＞を紹介したい。

2.2 『若草物語』連作における孤児

『若草物語』は南北戦争中の話で、お転婆だったりおとなしすぎたりする4姉妹が、自分の欠点を克服しながら「小さな淑女」に成長する物語だ。その最終章で次女ジョーが、「恵まれない子」たちのために家庭的な学園を建てたいと言う。彼女の希望通り、『若草物語』の続編でジョーは、白人に加え、ホームレス、障害者、ほかの学校で入学拒否をされた子、虐待を受けた子の教育を始める。

多様な背景を持つ子どもを引き受けるこの学園の特徴は、ジョーたち教師が教育に加え、いわゆるしつけのレベル、たとえば料理や掃除などの家事、衛生、道徳、動物の世話までも教えていく点だ。その目的は、生徒が卒業後に困らないよう教育を与え、家事労働などを手ほどきしていくことにある。

この学園と同様の活動を、約150年経った異国の地、日本でしているのがわたしの実家であろう。次節では、わたしの両親による「本岡ホーム」の紹介を行なう。

2.3 本岡ホームの子どもたち

わたしの両親は1986年より、養子や親族などの条件なく、その子が社会に巣立つまで引き取る「養育里親」を行っている。両親は2002年、虐待を受けた経験のある子を養育する「専門里親」に認定された後、2010年より家庭的な環境で5～6名の被虐待児を育てる「小規模住居型児童養育（ファミリーホーム）事業」を始める。現在、「本岡ホーム」で預かる5歳から高校1年生までの里子5名は、両親の離婚、再婚、育児放棄、暴力による生後約1か月での複雑骨

折などを経験してきた。それらの家庭環境が主因で彼らは、概して摂食障害、衛生観念や学習意欲の欠如、そして何より自尊心の低さなどの問題を抱えている。情緒不安定と過去のトラウマが相まり、転入2日目にして、自分の肩を触ったクラスメイトに暴力を振るった里子もいる。その後も相次いで問題行動を起こすため、彼の通う学校では2年間に担任3名がうつ病を患ってしまった。また校長室には里子専用のブザーが設置され、それが鳴るたびに校長先生が学校中を駆けずり回ってらっしゃったようだ。

ただ、彼がその学校に転入したからこそ変わったこともある。まず、その里子を募って自閉症児が通学を再開した。例の校長先生の依頼もあり、今では、その生徒が欠席すると里子が電話して学校に誘うシステムが出来ている。また、児童相談所や教育委員会の働きかけ、なにより小中学校の先生方のご尽力で、情緒障害児教室が設立されることになった。虐待経験児だけではなく、いわゆる「なかよし学級」に入るまでもないものの、教室の中に埋もれている情緒障害児の救済にもつながったと言えるだろう。

2.4 本岡ホームの子どもたちとわたし

ありがたいことに、近年、両親に発表や講演の依頼が多く寄せられるようになった。そのような両親を誇りに思うとともに、後で発表原稿を見せてもらって複雑な心境に至ることもある。たとえば、ある発表で父は、「里子たちが成人し、人の親になった時に、本岡ホームでの笑いが絶えない食卓を思い出してくれると信じています」と述べたようだ。その通りと思う一方、わたしは、自分自身に家族団らんの思い出が少ないことに気付く。特に、仕事の忙しかった父とは、月に1回、事務連絡程度の話しかしない時期が8年間続いた。だから率直に言ってわたしは、父の発表原稿にある「笑いが絶えない食卓」をあまり記憶していない。

わたしが得られなかった家族団らんを、本岡ホームの子どもたちは日々経験する。彼らが得をしているのかと言えば、そうではない。彼らも実の親から得られなかった愛情を、違う対象から受けているだけだ。

ただ、里子たちをうらやましく思うことはある。愛情が決定的に足りない彼らは、必ず一度は赤ちゃん返りをする。つまり、新しい里子が来るたびに、一番新入りだった子が焼きもちを焼き、体で表現するのだ。それは年齢や性別にかかわらない。中学生の男児が、60歳を過ぎた父親の膝の上に乗る。人から見ると奇妙なのかもしれないが、里子たちにとっては必要な成長過程と言えよう。

でも、わたしに同じことができるだろうか。今更父親の膝の上に乗ることはできない。頭を撫でてもらったら、わたしは涙を流すだろうか。わからない。わたしは、年長の時に預かった里子（今の次女）のいわば親代わりになるよう期待されてきたため、両親に甘える時期を逃したのだろう。だからこそわたしは、両親の発表原稿を見ると時に困惑する。

親元から離れてから13年が経つ。月日が流れて、母の里子日記や両親の発表原稿を読むことがようやくできた。里親制度について考えてみようと、重い腰をあげられたのも、この月日があったからかもしれない。わたしがあまり経験できなかった＜ホーム＞を、今いる里子に経験させてほしいと今は心から思う。わたし自身の内なる感情は、子どもや家族を研究していく上での自分の糧にしていきたい。わたしにとって実家とは、自分が帰省するホームであり、自分の研究の原点について振り返る出発点としてのホーム、里子たちの居場所、ファミリーホームとしての公的な機関など、いろいろな意味を帯びているのだから。

研究集会での発表や本稿の執筆を通して、これからも孤児の問題、家族の問題を研究し続けていこうと改めて感じた。まだまだ若輩ながら、アメリカ文学研究を志してきた一研究者として、今までの研究や、その原点ともいえる実家の里親活動について振り返るきっかけを与えて下さった本研究集会とその関係者の皆様に感謝の意を表する。